

唐招提寺

四季折々

春

境内の所々に梅、桜などの花が季節の移ろいに合わせて次々と色をそえていきます。御影堂供華園では、琼花の花が、春の終わりと夏の到来を告げるように、小さな白い花を咲かせます。

夏

白い可憐な琼花の季節が終わると、境内は夏を迎えます。境内の木々の緑はその色をまし、白や淡いピンクの蓮、さらに菖蒲が境内の池で花を咲かせます。

秋

九月を迎えると唐招提寺境内のいたるところで、白と薄紅色の萩の花が小さな花を咲かせます。木々が紅や黄色に色づく頃には、中秋の名月をめぐる観月讃仏会が行われます。

冬

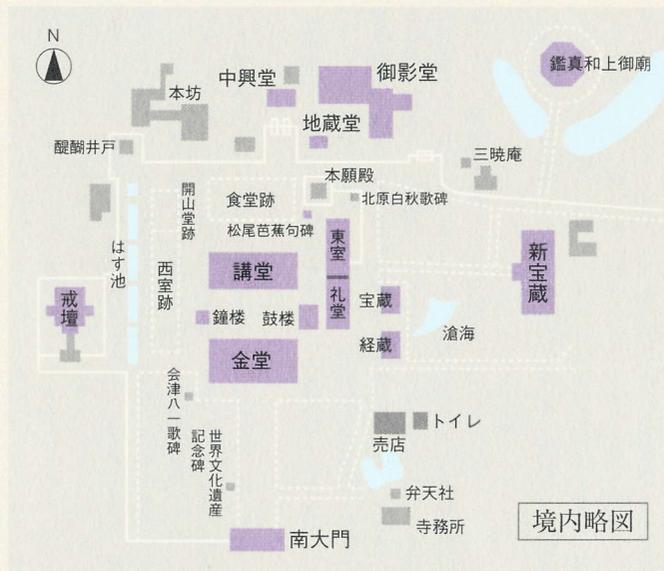
吹く風に冷気がまじり、街はあわたださを日に日にまわしていく冬。唐招提寺の境内は、白い雪におおわれることもあります。冬には、迎春に備えて仏像のお身ぬぐいがあり、新しい年の平安を祈る行事が行われます。



※年中行事

- 一月一・三日——修正会
- 一月十五日——大般若転読会
- 二月十五日——涅槃会
- 四月～五月——御影堂供華園（琼花特別開園）
- 五月十九日——中興忌梵網会（ちわまき）
- 六月五・六・七日——開山忌舍利会
- 八月二十四日——地藏会
- 中秋名月の日——観月讃仏会
- 十月二十一～二十三日——釈迦念仏会
- 十二月十五日——お身拭い
- 十二月三十一日——除夜の鐘つき

*日程は変更される事もあるので、あらかじめご確認下さい。



拝観時間 8:30～17:00 (受付は16:30まで)

律宗総本山 唐招提寺

〒630-8032 奈良市五条町 13-46
Tel.0742-33-7900 Fax.0742-33-5266
URL. <http://www.toshodaiji.jp>

唐招提寺





御影堂 上段の間 山雲 東山魁夷画



金堂内陣 手前から薬師如来立像、盧舎那仏坐像、千手観音立像



国宝 金堂

鑑真大和上と唐招提寺

鑑真和上は六八八年に中国揚州で誕生、十四歳の時、揚州の大雲寺で出家されました。二十一歳で長安実際寺の戒壇で弘景律師に授戒を受けたのち、揚州大明寺で広く戒律を講義し、長安・洛陽に並ぶ者のない律匠と称えられました。七四二年に日本からの熱心な招きに応じ渡日を決意されましたが、当時の航海は極めて難しいもので、鑑真和上は五度の失敗を重ね盲目の身となりました。しかし和上の意志は堅く、七五三年十二月、六度目の航海で遂に来朝を果たされました。

翌年和上は東大寺大仏殿の前に戒壇を築き、聖武太上天皇をはじめ四百余人の僧俗に戒を授けました。これは日本初の正式授戒です。鑑真和上は東大寺で五年を過ごされたのち、七五八年大和上の称号を賜りました。あわせて右京五条二坊の地、新田部(たご)親王の旧宅地を賜わり、天平宝字三年(七五九)八月戒律の専修道場を創建されました。これが現在の律宗総本山唐招提寺のはじまりです。

金堂

奈良時代(8世紀後半) 寄棟造・本瓦葺

南大門を入り参道の玉砂利を踏み締めて進むと、誰もが眼前に迫る金堂の偉容に圧倒されます。豊かな量感と簡素な美しさを兼ね備えた天平様式、正面に並ぶ八本のエンタシス列柱の吹き放ちは、遠くギリシャの神殿建築技法がシルクロードを越え、日本まで伝来したかのように感じさせます。会津八一は「大寺のまろき柱の月かげを土に踏みつものをごそ思え」と詠み、井上靖は和上の生涯を『天平の甍』と題した小説に書き、その名を世に広めました。内陣には像高三メートルに及ぶ盧舎那仏(るしゃなぶつ)を中央に巨大な三尊「乾漆造(かんしつづくり) 国宝」が居並び、厳肅な空間を生み出しています。本尊・盧舎那仏坐像(大仏)は宇宙の中心、釈迦の本地仏として中尊に、その東方に現世の苦悩を救済する薬師如来立像、西方に理想の未来へ導く十一面千手観世音菩薩立像が配されています。本尊の脇士には等身の梵天・帝釈天立像「木造 国宝」が従い、須弥壇(しゆみだん)四隅には四天王立像「木造 国宝」が諸尊を守護しています。創建以来の天平金堂と、内陣の九尊が織りなす曼荼羅世界は、参拝者を魅了せずにはおかないでしょう。

講堂

奈良時代(8世紀後半) 入母屋造・本瓦葺

講堂は、和上が当寺を開創するにあたり平城宮東朝集殿を朝廷より賜り移築したもので、平城宮唯一の宮殿建築の遺構です。本尊弥勒如来坐像「鎌倉時代 木造 重要文化財」は釈迦牟尼仏の後継で、将来必ず如来として出現し法を説くとされます。そのため通常は菩薩像ですが、本像は如来像として表現され、金堂の三尊と合わせて顕教四仏となる古式で配列されています。持国・增長の二天「奈良時代 重要文化財」も講堂内部に共に配されます。

鼓楼

鎌倉時代 仁治元年(一二四〇) 楼造・入母屋造・本瓦葺

瀟洒(しょうしゃ)な重層の建物で、本来は経楼とみられますが、鎌倉時代に再建されたのち鼓楼と呼称されたようです。一階に和上将来の三千粒の仏舍利を安置しているところから「舍利殿」とも称されます。毎年五月十九日には、鎌倉時代戒律を復興した大悲菩薩覺盛上人(かくしょうしようにん)の中興忌(うちわまさ会式)が行われ、法要後、楼上からハート型の宝扇がまかれます。この鼓楼と対をなす建造物として鐘楼があり、当初の建物は残っていませんが、梵鐘「重要文化財」は平安初期の数少ない遺例でたいへん貴重なものです。

礼堂・東室

鎌倉時代 弘安七年(二二八四) 入母屋造・本瓦葺

南北に長い建物で、従来は僧侶の起居した僧坊でした。講堂を中心に西と北にもそれぞれ建物があり、三面僧坊と呼ばれていましたが礼堂・東室のみが現存しています。中央の馬道(めどう)と呼ばれる通路で南北に分けられ、南半分の礼堂は解脱上人貞慶(けだつしようにんじょうけい)が始修された「釈迦仏会」の会場に改められました。この法要では和上将来の仏舍利・金龜舍利塔(きんきしりとう)「国宝」が本尊として礼拝されますが、平素は清涼寺式釈迦如来立像「鎌倉時代 重要文化財」が安置されています。

宝蔵・経蔵

ともに国宝 奈良時代(8世紀) 校倉・寄棟造・本瓦葺

礼堂の東側に並んで建つ校倉(あせくら)様式の建物で、北に位置し一回り大きい方が宝蔵です。南にある小さいほうの経蔵は、唐招提寺が創建されるより前にあった新田部親王邸の米倉を改造したものだといわれ、日本最古の校倉です。

御影堂

重要文化財 江戸時代

もと興福寺別当一乗院の宸殿と殿上の遺構で、昭和三十八年(一九六三)に移築復元して鑑真和上坐像「国宝」を納め御影堂としたものです。昭和五十年には東山魁夷画伯による障壁画が揮毫奉獻され、和上の像を奉安する静寂な宸殿に、一層の荘厳さをもたらしました。毎年六月六日の開山忌舍利会の際、前後三日間だけ御影堂内が公開され、鑑真和上像を参拝することができます。